
反転・遊戯 ―リバーズ・ゲーム― 6（仮） 下

神代家家長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

反転・遊戯 ーリバース・ゲームー6（仮）下

【Nコード】

N2449P

【作者名】

神代家家長

【あらすじ】

反転・遊戯 ーリバース・ゲームー5（仮）上の続き。

第一章

「さてと。どの辺にいろのかな？」

既に待ち合わせから10分強の遅刻。しかも二時間待たせてからの、だ。その意味で多少は急いだ方が良いのだが、そう広いとはいえない公園とはいえ人一人を探すのには少し手間取る。

「・・・」

嘘だけど。

本当ならテンペストなりゴールドなりの助力を得れば簡単に見つけ出せるのだが今それをやると監視されていた場合、俺が彼女らの助力を得ているという秘密に対するアドバンテージを失うことになる。

だから俺は待ち合わせの相手の場所を知りながら適当に公園を歩きまわって無駄な遠回りをしているわけだ。

そうして迷う事、更に10分強。

やっと俺は待ち合わせの相手のところへと辿り着いていた。

「遅いわ」

そして待ち合わせの相手の反応は当然と言えば当然のものだった。「こっちの予定も聞かずにいきなり来いっていう方が無理なんだよ。おまけに公園に入ってから目の目印も決めてなかったし」

「言い訳は良いわ。兎に角、いらっしゃい」

そう言っただけで俺が付いてくるのが当たり前のように先導して歩き始める彼女——館社鏡美。

素直についていても良かったのだが念の為に対応を少しばかり面倒な手順をとることにする。

「待てよ。いきなり呼び出して一体何の用なんだ？」

「付いて来れば分かるわ」

予想通りの返答。だが意図して俺はふてくされた顔を作って彼女

に付いていく事にした。

彼女が俺を案内した場所は公園内でも更に人気がないと思われる最奥部、しかも――。

「・・・」

俺の予想が間違いないければ俺が公園に入った瞬間から公園が何らかの手段で閉鎖されていた。これで余程のことが無い限り俺たちの会話が外部に漏れる心配は無いわけだ。

「さてと。まずはお互い自己紹介から始めましょうか」

「お互いの名前なら知っているはずだけど？」

彼女の言っている意味を理解しながらも俺は惚けてみる。

「回りくどい事は好きじゃないの。私の事はロンドと呼びなさい」

「ロンド、ね」

恐らく彼女――館社鏡美の能力の略称なのだろうがやはり能力者として覚醒していたか。

「貴方は？」

「スフィアと呼ばれている」

「なるほどね」

無論、偽名な訳だが今の彼女に俺の本当の能力名を知る手段はないし、わざわざ俺の本当の能力名を追及しようとする意思もあるまい。

「さて。本題だけど私は今強い味方を集めているわ。こうして直接スカウトに来るのも貴方が初めてではなく何人かを審査してきた中で以前貴方との会話を思い出して貴方に連絡したの。そういうわけで行くつか質問させて貰うわ」

「・・・」

相変わらず俺の意見なんてどうでも良いらしい。

「まず貴方は今何らかの組織に加入しているのかしら？」

「入ってるよ」

「その組織は少数？それとも大所帯かしら？」

「他の所に比べれば少ない方だ」

「貴方が能力者に覚醒してどのくらい？」

「約1年」

他にもいくつかロンドの質問に答えていったが俺が知る限り重要な質問は出てきていない。

「なるほどね」

そして延々と意味のあるのか無いのか分からないような質問を続けられた後、ロンドは何かを納得したらしかった。

「最初に私は強い味方を集めていると言ったけれど何もあてが無いまま味方を集めて居る訳ではないわ。私には今味方に引き入れたい組織が存在して、その組織と交渉する為に最低限の戦力を集める前段階の準備をしているの」

「引き入れたい組織？」

それってもしかして――。

「貴方は今私が引き入れたい組織が巷で噂の『アポカリプス』ではないかと思ったでしょう？」

「違うのか？」

「違うわ。私が求めている組織はそんな井の中の蛙のような組織ではないの。世界でも有数の能力者組織、私の相手はもっと強大よ」

「へえ」

俺達が井の中の蛙、ね。しかし俺が知る限りでは今の俺たち以上に充実している組織なんてまともに機能しているところがあったか？

「その組織と交渉する為に私は今戦力面と資金面の両方をクリアする為に動いているの」

「ふん」

戦力面と資金面、ね。結局のところ能力者組織といえ維持には金が掛かる。その意味では確かにロンドは優秀な人材なのだろう。

「さて。そろそろ時間ね」

「時間？」

ロンドに釣られて時間を確認してみるがそろそろ日が落ちる時間だ。どちらかといえば俺にとって都合のいい時間の筈なのだが？

「私とて有象無象に仲間を集めているわけではないの。これから貴方にはテストを受けてもらうわ。それに合格できれば貴方は私の仲間、合格できなければ・・・」

スツとロンドの目が細まり冷たい雰囲気を纏いだす。

「永遠に口を封じさせてもらうわ」

「勝手にぺらぺら喋っておいて随分だな」

「私には時間がないの。手段を選んでいる余裕もね」

「・・・」

どうやら本気らしいロンド。正直こんな茶番に付き合う義理は無いのだが――。

「待たせたね」

ロンドの背後から現れる一人の男。どうやら拒否権は無いらしい。「紹介するわ。彼が貴方の試験管よ。彼を打倒出来るかどうかが貴方の試験。勿論、簡単な相手ではないけれど」

「いやいや」

ロンドの言葉をさえぎるように試験管の男は俺を見て首を振る。

「今回は珍しく当たりのようだよ、ロンド。彼はどうやら・・・げふ!!」

そして俺に親しげに話しかけてきた男は唐突に――本当に唐突に背後から物凄い衝撃を受けて地面に叩きつけられ――。

「ごぼ!!」

そのまま背中を地面が陥没するような威力で踏みつけられて地面に縫い付けられる。

「あら。ごめんなさい。貧相な背中が見えたものだからつい踏んでしまったわ」

能面のような顔でそう言い切ったのは俺の知っている相手だった。「お待たせしました。準備に少し手間取ってしまいました」

そして足元の相手に向けるのとは180度違う笑顔で俺に振り返る美しい吸血鬼――セシリア。

「せ、セシリア!! デイ!! アルトレリア! 生きていたのか! ?」

「どちら様かしら？私は貴方のような腰巾着に知り合いなんて居ないけれど」

いきなりの事に流石に俺も驚いたが、どうやら男はセシリアの知り合いらしい。セシリアの知り合いと言うことは必然的に奴も吸血鬼ということになるのだが。

「知り合いか？」

「不本意ながら。吸血鬼王家が存在した時に王族の腰巾着をしていた男です。私と違って吸血鬼的には平民出身の下等吸血鬼ですわ」
「なるほどね」

俺はその時点で大体の事情を察していた。

「一人で納得していないで説明して貰えないかしら？」

勿論、置き去りにされたロンドに適當されるわけが無いが。

「いたた・・・」

「大丈夫？」

「ああ。こう見えても僕は純血の吸血鬼だからね。もう暫くすればダメージも消えるよ」

腰を抑えて起き上がる吸血鬼の男。名前はディード・レイ・バルサムというらしい。セシリアと違って金髪碧眼の優男な吸血鬼だった。

「それで？」

「ああ。セシリアが居たのは予想外だけど今回は大当たりだよ」

「どういう意味？」

「この事だろう」

ディードとロンドの言葉に割り込んで俺は腰の後ろに差したままにしておいたミタマを引き抜いてみせる。

「懐剣？」

「神剣・御魂得の剣。お前の探していた神剣使いの一族が持つ正當な継承者の証だよ」

「！」

俺の言葉にロンドが凍りつく。

吸血鬼が関わっている時点でロンドの探している相手が『神剣使いの一族』である事は予想が付いていた。もっとも俺がロンドの言葉にピンと来なかったのは今の神剣使いの一族がロンドの言うほどの勢力を持っていないからだ。戦力的には彼らを取り込んだ俺達の組織の方が強いくらいだ。

「なるほど。それで吸血鬼を飼いならす事もお手の物というわけね」
「人の女をペット扱いしないで貰いたいね」

俺はロンドに見せ付けるように隣に控えていたセシリアを抱き寄せる。セシリアは俺の意図を理解しているのかいないのか喜んで俺にしがみついて頬ずりしてきたけど。

「吸血鬼の女はこんなにも簡単に陥落するものなの？」

「まさか。ありえないよ。しかも彼女は吸血鬼の中でも貴族も貴族、それも王家に最も近いとされる最高位の称号を持つ貴族で、その気位は王族にも引けをとらなかったんだけど・・・」

現状俺に甘えまくっているセシリアを見て自信がなくなったのか言葉を止めた。

「まあ彼と話の続きをしようじゃないか。彼を味方に出来れば僕達の目的の為の手段は一気に短縮される事になるよ」

「そうね」

少し不機嫌そうにしながらも相槌をうつロンド。

「貴方が本当に神剣使いの一族だと言うなら吸血鬼の存在の有無を議論する事はないでしょう。私達の目的は・・・」

「吸血鬼王家の残党でも闊歩しだしたか？」

「・・・」

「吸血鬼と組んで、しかも神剣使いの一族を探している時点で予想は容易い。お前は少しばかり自分の能力を過信しすぎなんだよ」

「気分が悪いわね」

まあ思考を先読みされるのは誰だって気分を害するものだ。

「つまりお前の目的はその吸血鬼に依頼か何かをされて闊歩しだし

た吸血鬼王家の残党どもを始末したいって事か」

「細かいところを省いて要約すればそう言う事になるわ」

「話にならない」

俺は内心では納得しながらもロンドの話を斬って捨てた。

「吸血鬼の退治依頼をよりによって吸血鬼から受けている時点で論外だ。一体どこにその吸血鬼を信用する要素があったのか聞きたいところだね」

「私の人を見る目は確かよ」

「俺に対してもか？」

「・・・」

一々苛立つロンド。こいつ思ったよりカモだわ。

「お前の目も話も信用出来ない。よって一族は動かない。結論は以上だ」

「待ちなさい！話はまだ終わってないわ」

足早に立ち去ろうとした俺をロンドが慌てて引きとめる。内心ニンマリ。ロンドが気付いているかは知らないが完全に主導権が俺に移っている。今の立ち位置はロンドが提案する係、俺が決定する係だ。

『相変わらずこういう事をさせたら超一流ね』

『頼もしいと言えば頼もしいのですけどね』

そんな俺の所業に俺の装備した眼鏡とピアスから呆れた言葉が送られてくる。しかし右耳のイヤホンは沈黙したままだ。どうやら正当な神剣一族出身のエアーズ的には複雑な心境らしい。

「竜ヶ崎綾香」

「あ？」

テンペスト達の会話に気を取られた俺の興味を引こうと必死なのかロンドが発した名前に俺は意識を戻される。

「目的の為に資金面でも動いていると言ったでしょう？竜ヶ崎綾香。それが私の考える資金面を潤滑にさせる切り札よ」

「・・・」

「貴方も名前くらいは聞いた事があるでしょう？世界を牛耳る竜ヶ崎グループ。その現総帥の一人娘で次期総帥、竜ヶ崎綾香。生まれ持ったのカリスマ」

「それが？」

「彼女を私の傘下に入れる事が出来れば資金面は一気に解決すると思わない？少なくともそのプランは既に私の中にある」

「へえ」

竜ヶ崎綾香、ね。

「しかし実際問題、その女を味方に出来たからと言って資金を引き出せるのか？カリスマだか何だか知らないが『次期』総帥なんだろう？」

「例え竜ヶ崎グループの全てを動かす事は出来なくても10億や20億は引き出せる筈よ。現状、私の目的にはそれだけあれば十分だわ」

「ふん」

さて。どうするか。

『一応報告しておきますが話の間に周囲を取り囲んでいた者達は残らず沈黙させた上でウチの手の者に引き続き公園を包囲させています』

手順を考える俺にゴールドから連絡が入る。つまり今この場に居る俺達以外には話は漏れないと言う事。上出来だ。

「ターゲッтスファイア爆破指定」

「え？」

「俺の能力名の真名だ。お前にもあるだろう？」

「ええ。それが？」

「お前は知らないかもしれないが真名を明かす事は相手を信頼し受け入れる事を指す。無論、両者の合意を持ってすればだが」

「では・・・！」

「答えるのは俺ではない筈だが？」

「ええ。そうでしたね」

俺の是の方面に解答している事で胸をなで下ろすロンドとデイド。

「私の真名は『ロンドイェレクトリック舞踊発電』です。名前から分かる通りに念動発電能力者よ」

「へえ。珍しいね」

ニンマリ。

『意地悪ね』

『こういうのは性質が悪いというのではなくて?』

外野は無視して俺は懷から『それ』を取り出した。

「ついでと言っちゃなんだけど記念にこれをやるよ」

「何? それ」

「能力制御増幅装置。腕に付けるだけで能力を制御しやすくした上に増幅してくれるって代物だ」

「便利な物があるのね」

そして何の疑問も覚えずに彼女はその『腕輪』を腕に通した。

「気分はどうだ? ロンドイェレクトリック舞踊発電」

「な! ?」

そして俺の言葉に硬直し動揺を漏らすロンド。ふむ。どうやら真名は嘘ではなかったらしい。俺と違って。

「セシリア」

「はい♪」

そして俺の事をちゃんと分かっているセシリアは間違えなかった。

「な、何を!」

「黙りなさい」

「ごふ!」

成り行きを呆然と見ていた役立たずの吸血鬼を力づくで制圧して――。

「貴方には勿体無すぎるけれど一滴だけ私の血をあげるわ」

「!」

無理矢理口を開かせてその指から血が一滴ポタリと入り。

「があ!!ぎひい!!」

受け入れがたい隷属の因子によってもがき苦しんでいく。まあ、いくら抵抗しようとも今のセシリアの隷属因子からすれば時間の問題だろう。

「後は間抜けにサービスしてやるとするかな」

「い、一体何が・・・」

腕輪をした状態で真名を呼ばれると呼んだ者に逆らえなくなる。

しかもロンドに渡したのはエアーズが改良を施した物ではなく俺達が本部に居た頃に使っていた物に近い。自分で取り外す事は不可能だった。

「ほれ」

「携帯電話?何を・・・」

「良いから受け取れば良いんだよ」

「?」

一から十まで訳の分からないまま俺に手渡された携帯電話を眺めるロンド。そして思惑通り直ぐに着信音を鳴らし始めた。

「ど、どうすれば?」

「取れば?」

「・・・」

最初に出会った時からあった自信が完全に身を潜めオズオズと俺に言われた通りに電話に出るロンド。

「もしもし?」

そして『彼女』との会話が始まる。

「貴方、誰?」

勿論、最初から『そう』と分かる訳もないが徐々にロンドの顔が青ざめていく。

「ま、まさか」

「自分がどれほど間抜けか分かったか?」

「あ、ありえない」

ロンドの電話の相手。

一言で言ってしまうえば『竜ヶ崎綾香』だった。

そして別名――ゴールド。

俺達――巷ではアポカリプスと呼ばれている組織の指導者こそが
ロンドの求めてやまなかった竜ヶ崎綾香だった訳だ。ロンドの間拔
けにも程がある。

第一章（後書き）

やっと完成しました。

なるべく時間を置かずに投稿していくつもりですが修正の為にチェックしながらの投稿になるので少し間が空くかもしれません。

第二章

「さてと。とりあえず間抜け二人の制圧は終わった訳だけど、どうするか」

「馬鹿な真似は止めなさい。貴方自分が何をしているか本当に分かっているの？」

呑気に事を構える俺にロンドが鋭く忠告を飛ばしてくる。

「少なくともお前よりは分かっているつもりだよ」

「吸血鬼を一匹飼いなしたくらいで現状をどうにかできるとでも思っているの？ 分からないようだから言っておくけど世界の危機なのよ」

「世界、ね」

ロンドの知る情報で吸血鬼が何匹いるのか知らないが吸血鬼の数は多くはないだろう。しかもセシリア経由で人間を隷属させる事は出来ても吸血鬼化出来ない事も分かっている。その現状で世界の危機とやらが訪れるとは思えない。

「ついでに言うと、この公園は私達の傘下の者が包囲しているわ。

死にたく無ければ私達を解放しなさい」

「ああ。その包囲ならとっくに制圧したよ」

「！」

俺は『制圧した』と聞いただけだがゴールドがそう言ったなら間違いはないだろう。

『ああ。その点に関して一つ報告があります』

「ん？」

『確かに私達は彼女の包囲していた部隊を制圧しましたが約1名、問題のある人物がまぎれていまして。恐らく彼女の持つ人間側の手駒の最強のカードです』

「何が問題なんだ？」

少なくともロンドが用意出来る手駒程度なら問題なく制圧出来る

戦力は整えていた筈だが。

『会ってみれば分かります』

「へいへい」

仕方なく俺はロンドを引き連れ、その問題の1名に会う事になった。

「なるほど、ね」

そして会った瞬間に納得した。

「まさか『こいつ』がロンドの手下になっているとはね。これは確かに問題だわ」

「ふん。相変わらず卑劣な男だ」

俺の正面に立つその男。そしてそいつの隣に立ち複雑そうな顔で俯く和服姿で白髪的美女――玉藻。

「玉藻に制圧の方を頼んでおいたのは正解だったようだな」

言いながら俺は玉藻をチョイチョイと手招きで呼び寄せる。玉藻は重い空気に辟易していたのか嬉しそうに俺の隣に走り寄ってきた。
「ち」

それを見て面白くなさそうに舌打ちする男――アクセ。玉藻の元カレと言うべきか。

「し、知り合いなの？」

俺とアクセの關係に驚きを隠せない様子のロンド。

「ま。昔に色々ね」

「ち。相手がリバースと知っていればもっと周到に用意を促したものを」

「り、リバース？あのアポカリプスのエースの？」

そう言えば俺の自己紹介をキチンと済ませていなかった。

「間抜け女の方は後で対処するとして、お前をどうするかな」
「・・・」

元・本部所属、狩人班第一班、班長アクセ。

能力者としては申し分ないが腕輪の能力者だ。そして奴にも現状

は理解出来ているのだろう。奴と同等かそれ以上の能力者達に囲まれているという現状を。

だからアクセは俺の出方を待っていた。

「お前、ウチで働くつもりはないか？」

「何？」

「ああ。勘違いする前に言っておくが玉藻とは金輪際会わせるつもりはない。玉藻は俺の女だからな」

「・・・」

「俺とお前の関係を抜きにして1能力者としてウチに来ないかと誘っているんだ」

「話にならない」

「そうかね？お前がロンドなんかの下に居たのは資金不足が原因じゃないのか？」

「・・・」

「当然の帰結だな。本部を離れたお前に預金が残っているとも思えないし、一級能力者であるお前に早々普通の仕事が務まるとも思えない。だから仕方なくロンドなんかの下で働く羽目になったんだろう？少なくとも俺のところに来れば資金面は保証してやるぞ」

「相変わらず口のまわる男だ」

そもそも本部を離れた時点で俺達だってゴールドがいなければ資金面で四苦八苦していた訳だし、コネもなさそうなアクセが今までやって来れた事自体が奇跡みたいなものだ。

「金銭などで本気で俺がお前に尻尾を振るとでも思っているのか？」

「別に。嫌ならこれ以上は誘わんよ。玉藻が居る俺達をお前が売るとも思えないし普通に解放してやっても良い」

「・・・」

最大級と言える妥協案を出してやったというのに今日最高に不機嫌になったアクセは俺の盛大に睨みつけて――。

「ふん」

一枚のカードを俺の足元に投げつけてから足早に去って行った。

「不器用な奴」

俺は足元のカード――アクセの連絡先を拾い上げて肩を竦めて呟いた。

「大丈夫でしょうか？」

「心配か？」

アクセが立ち去って不安そうな顔の玉藻の問いに俺はちよつと意地悪な質問を返してやった。

しかし――。

「そこで何と言ったらヤキモチ焼いてくれますか？」

「・・・」

一本取られた。玉藻も言うようになったもんだ。

「ま。あいつに関しては心配ないだろう。それより問題は・・・」
俺を背後から睨みつけて殺しそうな視線を向けてくる間抜け女。

「騙したのね」

「はい。騙しました。スフィアってのは俺が対外用に用意した便宜上の能力名で存在すらしているのか知らない能力名でした」

「く」

自分の迂闊さに歯を食いしばって悔しがるロンド。しかし真名を暴露した上に腕輪を着けられては後の祭りというものだ。

「そっちはどうだ？」

「腰巾着にしては頑張っている方ですが、もって後数分と言ったところですね」

俺の視線と問いに答えたのはセシリア。彼女が隷属の因子を植え付けたデイドは意外にもまだ頑張っていたがそろそろ限界らしい。「ゴールド。ロンドの部下の方は？」

『能力者が28名。支援者が50名程です。能力者の方が皆殺しにしましたが支援者の方は半数近く生け捕りにしてあります』

「上出来」

これからセシリアにご褒美をあげなくちゃいけない訳で、その意

味で生贄は必須だ。



「さてさて。どうするかねえ」

ロンドやディードの処理をゴールドに任せてから自宅へ戻ってきた夜中、俺は一人リビングのソファに深く座り込んでゆっくり考え事をしていた。

ロンドにはああ言ったが吸血鬼は強敵だし放置するには俺は関わりが強すぎる。

俺が一人拒絶をしても恐らくゴールドは事を進めようとする筈だし、エアーズも一族出身という立場から参加を表明するだろう。

つまりゴールドという頭と電子戦最強のエアーズ、ひいては神剣使いの一族全てと縁を切るつもりが無ければ俺は強制的に吸血鬼退治に参加な訳だ。

「まさか、こうなるとはね」

俺がロンドに真実を話して能力者に覚醒するように仕向けたのは彼女を火種として街に潜伏している能力者を一気に焙りだすつもりだった。

その企みは成功したと言って良いのだが――。

「余計な物までズルズルと引っ張ってきやがって」

ロンドは俺の予想と違うベクトルで裏切ってくれた。

ロンドからの情報では吸血鬼の残党は太平洋上の海域の小さな島を根城にしているらしい。総数は俺の予想通り多くは無かったが、少なく見積もっても5人はいるらしくロンド達の言う通りセシリア一人では流石に荷が重い。

「ゴールドに船の手配を頼んで、ロンド達には道案内を含めて同行させないとな。セシリアを連れて行くのは必須だから日光対策も考えないと」

暗い室内であれこれ考えを纏めていると不意に俺の前に誰かが立

っているのに気付いた。

「どうし・・・」

「お話があります」

そして『彼女』のプランが俺の行動を決定した。

★ 舞踊発電

なんだかんだ私を拒絶した癖に結局リバス達アポカリプスは吸血鬼退治に乗り出すことにしたらしい。

「だったら最初から協力すれば良いのに」

私もディードも自由を奪われた上に苦勞して集めた仲間を全滅させられてしまった。

「・・・」

もっとも私が集めた仲間よりかなり強力な戦力が手に入ったわけだけど。

「なんて顔しているんだい。あんた」

「別に」

私は埠頭で話しかけてきた長い赤い髪を持つ美女——女性に反転したらしいリバス相手に辟易していた。

リバスが女性になっているのは彼——彼女？の能力の一端らしいのだが私はそれとは別の理由で不機嫌だった。

「有象無象は不要なのではなかったの？」

「カモフラージュは必要さ」

吸血鬼の待つ島へ渡る為に龍ヶ崎綾香——ゴールドが手配した船を待っているわけだが埠頭で船を待っているのは私達だけではなくリバスが募集したらしい面識の無い者が十数名居た。

「だったら私の集めた戦力を壊滅させる事は無かったでしょう！」

「こいつらにはアタシ達の事を募集された1能力者と説明してある。あんたの集めた奴らじゃアタシ達と面識があり過ぎるだろう？」

「・・・」

自然と私は唇を噛みしめていた。少なくとも私ではこれだけの人数を短期間で募集する事は出来なかっただろう。リバース、もしくはゴールドの名があればこそその短期募集だ。

やはり能力者としての経験値が私とは違うのだろう。

「それにしても・・・」

それはそれとして――。

「それ。もう少しどうにかならなかったの？」

リバースの持つ大きめの鳥籠には少し辟易する。鳥籠には外側を暗幕で包まれていて日光が入らないように工夫されている。その意味からして中に入っているのは例の吸血鬼だろう。彼女を蝙蝠か何かに変化させて鳥籠の中で日光から護っている訳だ。

「切り札は肌身離さず連れて行くものさ。あんたは違うみたいだけど」

「当然よ」

ディードは既に出向する手筈の船の下層に棺桶ごと積み込まれている。

出航後。

私はゴールドの用意してきた船の大きさに辟易していた。お金って本当にあるところにはある物なのね。

その広い船の中の探索を終えてから甲板に戻るとリバースは見知らぬ少女と親しげに会話をしているとところだった。

「女の癖に女を口説くなんて何を考えているのかしら」

ま。本質的には男なのだろうけど『こんな時』に何を考えているのか。

それに――。

「集めるにしてももっとマシな人員は居なかったのかしらね」

リバースの集めた人員は有象無象とはいえ目立つ人間が多かった。酷い者になると全身をスッポリとフードに包んで素顔を全く外に晒

していない人までいる始末。あれじゃどっちが吸血鬼か分からない。
「ちょっと良いかしら？」

そんな事をツラツラと考えながら見知らぬ少女と楽しそうに談笑するリバースに割って入って話しかける。

「何？」

リバースは楽しい会話を邪魔されて不機嫌そうだけど構うものか。
「今見てきたけれどアクセを初めとして貴方の傘下の能力者が見当たらないようだけど？」

「ああ。奴らは来てないよ」

「・・・え？」

「まさかウチの組織全軍で街を離れる訳にはいかないからね。奴らには留守番を頼んでおいたのさ」

「貴方・・・吸血鬼を侮り過ぎよ」

私は足元がガラガラと崩れていきそうな感覚に倒れこみそうになるのを必死にこらえた。

「大丈夫さ」

「何を根拠に！」

「アタシが大丈夫って言ったんだ。絶対に大丈夫に決まっている」
「・・・」

今の話からすると、この船で戦力になるのは私とリバース、それにディードとセシリアとかいう吸血鬼。たったの4人だけ。

リバースの断言とは裏腹に私の不安はちっとも小さくならなかった。

船の速度と島の位置を考えると到着までには早くても2日か3日は掛かる。

私はその間の退屈と不安を紛らわせる為に能力訓練を行う事にした。

用意するのはビニールテープを巻いた空き缶。それだけだ。

「リング・スラッシャー」

言葉と同時に私の掌の上に私の能力で発電された電気の輪——戦輪クラムのような物が形成される。

「・・・」

私はそれを無言で空き缶に向かって飛ばす。

戦輪チャクラムが空き缶を通り過ぎると少し時間を置いてから空き缶が斜めに切断されて上半分が甲板に落ちる。

「お見事」

「！」

ある程度集中していた私は背後から聞こえてきた声に飛び上がるほど驚いた。慌てて振り返ると居たのは少女を隣に侍らせたリバースだった。

「覗き見とは趣味が悪いわね」

「こんな目立つ所で能力を公開しているあんたが悪いのさ」

まあ別に見られて困る物でも無い。

「それ。あんたが発電した電気の形を整えて高速で回転させているのかい」

「ええ。お陰さまで」

空き缶を切断した後、私の掌の上に戻ってきた戦輪チャクラムを見てリバースは感心している。

「大した切れ味と言いたところだが電気で斬れる訳が無いね。恐らく絶縁体との電気抵抗で焼き切ったところかな？」

「・・・」

悔しいが正解。私の電気の戦輪チャクラム——リング・スラッシャーは絶縁体に対して焼き切る技だ。絶縁体に電気というのは相性が悪そうに聞こえるが絶縁体に過度な電気を流せば膨大な熱が発生する。耐熱処理も施していない絶縁体、例えば人間の肌なんかは簡単に焼き切れてしまう。

「逆に導体に対しては相性が悪そうだ」

「・・・」

悔しいがそれも正解。私のリング・スラッシャーを導体に使うと

導体その物に流れてしまつて周囲に電気をまき散らして終わりになつてしまふ。下手なスタンガンよりは強力だが逆に言えばその程度の効果しかない。

「あんた電氣の能力者なんだから自分の神經に流して超反射を手に入れるとか出来ないのかい？」

「勘違いしているようだから言っておきますが私は発電能力者であつて帯電能力者ではありません。あなたの言うような使い方をすれば私自身が感電して終わりになります」

「へえ」

正直、以前にリバースの言うような事を試してみた事があつた。結果は最悪で私自身が感電して2、3日動けなくなつた。

だから私は自分の身体の外に電気を生み出して、それを操作するという手順を踏まなければいけない。

しかも――。

「ま。腕輪の方は役に立っているようでなによりさ」

「・・・」

皮肉な話、リバースに腕輪を貰うまでは私のリング・スラッシュャーは未完成も良いところだつた。

電気をリング状にして回転させるところまでは上手くいつていたのだが、そこからの操作が上手くいかず飛び道具のように投げつけるしか手が無かつた。結果、私の制御を離れたリングは対象に接触と同時に電気をまき散らし、それで終わり。

それが今では射程15メートルほどだが、その範囲の中でならいくらでもリング状の形を維持したまま自由に動かせる。しかも15メートルを超えても私が自分の意思で能力を解除しない限りは13秒間までならリングの形を維持したままの状態を保てる。

私の自由を奪う忌々しい物だが、それを別にすれば腕輪様々だつた。

その上――。

「ま。そんなリングを一つ作りだしたくらいじゃ脅威とは言えない

けどね。一つくらいじゃ」

「・・・」

忌々しい。

私がこんな目に付く場所で訓練を行える理由。私のリングの最大出現数が4つ。私は同時に4つまでならリングを半径15メートルの範囲で自在に動かせる。

それに気付いているリバースが忌々しかった。

第三章

★ 舞踊発電

私達が目的の島に到着したのは予想通り2日後の明朝だった。

しかし私達が島に上陸したのは日が暮れて真夜中を過ぎてからだ。吸血鬼相手に夜を待つ意味はこちらの主力も吸血鬼の為、向こうに有利になるうが最大戦力を生かせる時間を選ぶ必要があった。

そもそも相手は昼間には建物の中に引きこもっている訳で昼間に上陸する理由は薄い。

「ここからはグズグズしてられないわ。行くわよ、デイド」

「ああ。分かっているよ」

島に上陸してからいくつかのグループに分かれた私達の中で私はデイドと組んで島の探索を行っていた。

「・・・」

いつ吸血鬼に襲撃を受けてもおかしくない状況に私は自分で思っているよりも緊張しているようだった。普段ならこんな嫌な沈黙を続けさせたりはしないのだが、どうにも会話の糸口が見つけられない。

正直こんな沈黙が続くようなら敵が現れてくれたほうがマシだと思っ
てのは事実だ。事実ではあったのだが――。

「ようこそ。能力者の諸君」

「・・・」

本当に来られると流石に対処に困る。

現れたのは当然吸血鬼。細身の男で特になんら特徴のない人物だ。勿論、油断など出来る相手ではないが。

ともあれ戦いは先手必勝！

「リング・スラッシャー！」

私は最大出現数の4つを一気に男に投げつけ勝負に出た。
が――。

「え？」

私の投げつけた4つの戦輪は何の効果も生み出さなかった。

「残念」

「接地抵抗！？なんで貴方が私の能力の弱点を」

私の能力の弱点。それは電気的特性――電流とは抵抗の高い所から低いところへ流れるということ。その為、私の能力で作りに出した電気もその法則には逆らえない。その最たるものが接地抵抗だった。地面に鉄の棒を埋め込み、そこから導体のワイヤーを伸ばしても一つの鉄の棒へと接続する。そして鉄の棒を絶縁体で出来た手袋でも着けて手に持てば出来上がりだ。私のあらゆる攻撃はその鉄の棒に触れただけでワイヤーを伝って地面に吸い込まれて無効化される。

俗に言うアースと呼ばれる原理が私の天敵となる。

接地抵抗を用意された時点では私は能力者として完全に押さえ込まれたといっている。

「・・・」

しかし、それはあくまで私の能力を熟知していればの話だ。何故、敵であり且つ初対面の吸血鬼が私の能力に対して万全の備えをすることが出来たのか？

「君の能力は『切断』という一面においては重要視するものではないが電気という特性は少々厄介だ。絶縁体である皮膚を高速回転する電気のリングで焼き切り、その上で導体である血液に電流を流されては流石に吸血鬼も運動中枢を狂わされて一時的にはあるが行動不能にされてしまう。だから対策はとらせてもらったよ」

しかも、ここまでの確に。

私のリング・スラッシャーの一番の特性が完全に相手に漏れている。リバーズにすら真実は秘匿にしていた筈の事柄を完璧に、だ。

「別に驚くほどのことでもないだろう？君の能力の詳細はちゃんと

報告を受けていたのだから」

「報告？」

それは、まるで私の情報が何者かによって吸血鬼側に漏らされていたような言い方。いや。まるでではなく私の情報が漏らされていたのだ。

しかし一体誰に？

リバースとその一派の者達とは考えにくい。彼らに私の能力の詳細までは教えていないし、それに私の能力を敵に渡すメリットがない。

しかし、そうなると消去法で私か私の集めた仲間達ということになるが、それもまた考えにくかった。私は彼らにさえ私の能力の詳細を教えていなかったし、それ以前に彼らはリバース一派によってほぼ全滅している。

後、残っているとすれば――。

「え？」

一人しか残っていなかった。

しかし、それもまた考えにくい。何故なら『彼』は私に吸血鬼の脅威を知らせに來た張本人であり、率先して吸血鬼の暴走を食い止めるようとする同士で――。

「デイド」

「なんだい？」

「貴方なの？」

「何が・・・だい？」

「貴方が私の能力の詳細を敵に明け渡した裏切り者なのかと聞いているのよ」

「は？」

デイドの反応はとても自然なものだった。それにデイドではありえないのだ。デイドはリバース側の吸血鬼セシリアによって隷属の因子を埋め込まれて自由を奪われている。彼の意味で私たちを裏切ることなど出来るはずがない。

出来るはずがないけれど――。

「ご名答。その腰巾着が我々が君たちに送り込んだ諜報員だったのさ。もっとも本人にその自覚はないがね」

「な、何を言って・・・」

「出ろ」

「ごー!」

デイドの混乱をよそに敵側の吸血鬼は『それ』に命じた。その瞬間デイドは突然苦しみだし――。

「ごぶ!」

口から巨大な何か――人間の喉を通ってきたとは思えないほど大きな虫を吐き出した。

「な、何これ?」

「そいつは支配虫と言ってね。生物の体内に入れることによって対象の意識を完全に奪うことが出来る。無論、虫を入れられた奴にその自覚は無いけれどね」

「・・・」

最低だ。最低の狂人の発想と行動だ。

「セシリア嬢に隷属の因子を埋め込まれたのは予想外だったが、何。デイド本人を支配されても中にいる支配虫には影響が無い。何の問題もなかったよ」

「・・・いつからデイドを支配していたの?」

「無論、最初からさ」

「なんですって?」

「最初から。君に出会う以前からデイドは既に我らの支配下にあったのさ」

「ありえない。だったらどうしてデイドは私に助けを求めたの? どうしてデイドは世界の危機を知らせに来たの?」

「やれやれ。君は少しばかり、その腰巾着を信用しすぎじゃないかね?」

「・・・」

「そもそも、どうして我々吸血貴族が人間などを支配などしてはいけない？」

「どうしてって、それは・・・」

「その腰巾着は兎も角、我々吸血貴族は人間などという下等生物を支配する事に興味などないのだよ」

「だ、だったらどうしてデイドを・・・」

「吸血貴族とはいえ吸血鬼である以上、空腹とは無縁ではない。どこからか食料を調達しなくてはならないだろう？」

「ま・・・さか」

「特に君たちのような能力者の血は良い栄養源になる。合理的だろう？」

「く！」

なんてこと。

世界の危機といきがっていた私はとんだ道化だったわけだ。これではリバースのいうとおりではないか。吸血鬼達は世界を危機に陥れる気など無く――間抜けな私が敵の罠にかかったただけだ。

私は湧き上がる後悔を無理やり押し込めて目の前の敵に対して身構えるが――。

「無駄なことはやめておきたまえ」

「く」

私の能力は完全に封じ込められデイドは口から虫を吐き出しながらピクピクと痙攣したまま動かない。

「さて。傍観するのはこのあたりで良いだろう？」

だから彼は私から注意を『彼女』へと移す。いつの間にか近くに來ていた赤い髪の美女――リバース。

彼女は船を下りたときと同様、手には烏籠を持ち傍らには名前も知らない少女を侍らせていた。

「リバース。君の能力は広く出回っているらしく君に対する防備は問題ないが流石に最上位貴族であるセシリア嬢を一人で相手をするのは分が悪い」

そうだ。リバーズは兎も角、彼女の連れである吸血鬼の力は大きい。彼女ならば――。

「あ」

そう期待をこめた私はリバーズの背後から現れた影と、その影に弾き飛ばされる鳥籠に呆氣に取られる。

「ほっ！」

そして転がってきた鳥籠に目の前の吸血鬼がいつの間にか持ち上げていた大きな岩を叩きつける！

「確かにセシリア嬢を一人で相手をするのは骨が折れるが二人ならば問題ない」

「・・・」

まずい。デイドによって持たされた情報にはセシリアのことも含められていたらしい。彼女に関する防備も万全ということだ。

絶体絶命の窮地。

「さあ。吸血貴族である君がこの程度で死ぬ筈ないだろう？とっと出てきたまえ」

更に岩に押しつぶされたセシリアを取り囲むように包囲して追撃を加える準備を整える吸血鬼たち。彼らには私達人間に対する油断はあってもセシリアには警戒しているのが分かる。

しかし――。

「？」

彼らの予測とは裏腹に鳥籠を押しつぶした岩は沈黙を保ったままだ。

怪訝に思った彼らは岩を自ら押しのけてペシャンコにつぶれた鳥籠を持ち上げ――。

「居ない？」

鳥籠の中身が空だったことに首を傾げた。

「どういうことだ？セシリア嬢はどこへ行った？」

「逃げたのではないか？」

「ありえん。私はセシリア嬢が島に上陸したときからずっと監視し

ていた。少なくとも鳥籠から外には出ていなかった」

「では霧にでも変化して逃れたか？」

「私は細心の注意を払っていた。例えば彼女が霧に変化しようと見逃したりはせん」

「では一体何所へ・・・ごふ！」

唐突に、本当に唐突に吸血鬼の一体の体が硬直し、その腹から何かが生えて、その口から血が溢れる。

「誰かをお探しかしら？」

「き、貴様は・・・」

吸血鬼の腹から生えた物。細い、そして綺麗な白い腕だった。

「あ、貴方は」

吸血鬼の背後から急襲した人物。それは私の知っている人だった。知っている人だった名前すら知らない人――リバースの侍らせていた少女だった。

「き、貴様！一体何者・・・」

「貴方たちは吸血鬼に対しては警戒していたようですが人間、それもリバース一派ではないと思ひ込んでいた私に対しては酷く無防備だったようですね。だから・・・」

「ごふ！」

「こうなる」

それは信じられない光景。少女は背後から吸血鬼の体を串刺しにしたまま、もう片方の手で吸血鬼の頭を吹き飛ばした。人間の力では絶対にありえない行為。

「夜の吸血鬼は限りなく不死に近い存在ですが何事にも例外はある。例えば脳を3割破壊されても吸血鬼は問題なく行動出来る。それは残った7割の脳が破壊された3割の脳を補う事の出来る柔軟な吸血鬼の構造によるものですが逆に言えば3割を超えて脳を破壊されると極端に思考能力が落ちてしまう。更に5割以上を破壊されると一定時間行動不能になり、酷い時には・・・そう、例えば頭部を完全に破壊された場合数日間は何行動不能になる」

吸血鬼だけが知ると思われる事実を淡々と語り続ける少女。

「屋外で数日間も行動不能に陥れば日光に対する対策が出来ず、事実上吸血鬼的には死んだと表現しても問題ないでしょう」

「貴様、何者だ？」

余りにも吸血鬼に詳しい少女に対して流石に警戒して距離をとり始める吸血鬼の片割れ。

「ああ。そういえば偽装を施したままでしたね。そろそろ、この姿にも飽きました。解除をお願いします」

少女の言葉に呼応してどこから指を鳴らす音が聞こえ、そして少女の姿は霧が晴れるように崩れていき、その下から現れたのは――。

「せ、セシリア―ディ―アルトレリア!？」

リバースの吸血鬼セシリアだった。

「あ、ありえん! 一体いつの間に入れ替わっていた!？」

「別に入れ替わってなど居ませんよ。私は初めから、船に乗る前からずっと同じ姿で待機していましたから」

「それこそありえん! あの少女が船の上で、日光の下で活動しているのを確認しているのだぞ!」

驚く吸血鬼と同様に私も驚愕を隠せなかった。

そもそも彼女はどうかやって少女の姿に変身していたというのか？

私の知る限り吸血鬼にはそのような能力は無かった筈。

そうすると考えられるのは――。

「貴様の仕業かあ――!?!?!」

私と同じ結論に達したのか吸血鬼が無言で佇んでいたリバースに対して襲い掛かる! まずい! 最初の位置から動いていなかったリバースはセシリアと距離が離れている。あの位置ではセシリアの援護が間に合わない!

「死ねえ――!?!?!」

そしてアッサリと吸血鬼の腕がリバースの体を貫き――。

「え?」

そのまま体ごと通り抜けた。

「な・・・に？」

呆氣にとられる私と吸血鬼。

そして――。

「一応教えておきますがリバーズにも姿を偽装させるような能力はありませんので。セシリアの姿を偽装し、尚且つ日光から護っていたのは私の能力です」

私の背後から『彼女』が現れた。

「だ、誰？」

今度こそ私の完全に知らない人。でも、とても綺麗で大人っぽい女性。

「初めまして、かしら。私はテンペスト。リバーズの正式な相棒よ」

「自意識過剰にも程がありますね。ひきこもりの分際で」

彼女――テンペストの自己紹介に苦言を呈してきたのは意外にもセシリアだった。

「私がかから出られないのはリバーズが過保護だからよ。私は自分の身くらい自分で護れるのに」

「？」

彼女はセシリアに言い返しながらもそつと私の手を握って場所の移動を促してきた。私としては現状を把握出来ていなかったが彼女に引かれるままに場所を移し――。

「！」

今まで私の居た位置に私が居る事にギョツとした。

「私は鏡を模した能力者。鏡を使い光を操る。セシリアを別人に偽装した上で日光から護る事など造作もない」

「では、あの鳥籠は・・・」

「勿論、唯のフェイク。そもそもリバーズが自分の女を目的の為に言え鳥籠に閉じ込めるなんて事をする筈ないでしょう？」

「なるほど」

そう納得した吸血鬼は唐突にテンペストに攻撃を仕掛けた！

「！」

さっきまで私とテンペストが居た位置に居る幻影に。

「無駄よ。もう貴方に私の位置を知る事は出来ない」

「そこか！」

テンペストの声を頼りに更に攻撃を仕掛ける吸血鬼。だが当たらない。

「本当に便利なスピーカーだこと。変声機能の上に声を反響させる機能まで付いているんですもの。貴方にゴールド並の聴覚機能でもない限り絶対に私の位置を特定するなんて不可能よ」

「・・・」

そうか。そういう事か。つまり埠頭で会ったリバースは既に偽装を施したテンペストだった訳か。彼女がリバースに成りすましてした訳だ。

「ちい！下等な人間が小細工を」

「人間が下等かどうかの議論は兎も角、いつまでも私の相手をしていられる立場かしら？」

「・・・」

そう。ムキになってテンペストに攻撃を仕掛けようとしていた吸血鬼だが本来彼の相手は同じ吸血鬼であるセシリアであるべきだ。

「確か貴方は自分で言っていたわよね？セシリアと一対一で戦うのは分が悪いつて」

「ふん。確かに言ったな。だが、それも・・・」

吸血鬼はゆっくりとセシリアの方へと振り返ると、いつの間握り締めていたのか手に握っていた砂をセシリア目掛けて投げつける！

「やり方次第だ！」

そして砂に紛れるようにしてセシリアに拳を叩きつけ——そのまま通り過ぎた。

「な！？」

「馬鹿ね。あのリバースが『分がある』程度の勝率で自分の女を戦地に送り込む訳無いじゃない。勝率を限りなく100%に近付ける

為に私とセシリアを組ませたのよ」

「そうですね。女としての相性は最悪ですが、戦いの相性でいうなら私と貴方が組めば・・・」

「吸血鬼の一人や二人、敵ではないわね」

「・・・」

本当に最強だ。

敵に位置もタイミングも掴ませず、しかも攻撃者は怪力と表現してまだ足りない吸血鬼。彼女達が負ける要素が唯の一つも存在しない。

これがリバースの戦い方か。

呆気なく二人の吸血鬼を片付けた二人。

「流石と言うべきね。これなら確かにアポカリプスが全軍で動く必要は無いって事ね」

「はあ。何を言っているのやら」

二人に感心する私に何故か呆れて肩をすくめるテンペスト。

「私が船の上で言った言葉なら敵の情報を錯乱させる為の嘘よ。吸血鬼の脅威を知っている私達が吸血鬼を相手にする戦いで戦力を出し惜しむ訳がないでしょう？」

「そう。この戦いに出し惜しみなどという戦術は必要ない。大胆、且つ迅速に終わらせますわ」

「竜ヶ崎綾香!？」

テンペストの言葉を引き継いで現れた人物に私は度肝を抜かれた。

「まさか、貴方まで来ていたなんて」

「言ったでしょう？この戦いに一切の出し惜しみはありません」

メイドを従え歩み寄ってくる竜ヶ崎綾香——ゴールドの姿は威風堂々としたものだった。まさに指導者という肩書が相応しい。

「そっちも済んだみたいね」

「ええ。私とバイブルで吸血鬼を一体排除致しました」

「な!？」

唯、戦いに同行しただけではなく既に戦闘を終えていたというの？

「凄い。並の能力者じゃ吸血鬼には手も足も出ない筈なのに」

「貴方だけよ」

「？」

私の驚嘆に対するテンペストの言葉。その意味が分からず当惑する。

「この島に上陸した能力者の中で並の能力者は貴方一人だけよ」

「どういう意味？」

彼女の言葉のニュアンスから侮蔑されているという訳ではないようだが。

「船に乗り込む前に見た貴方の言う有象無象の全てがウチの傘下の能力者よ。そして、その全ての者に吸血鬼を打倒する役割を与えている。島に上陸した能力者の内、吸血鬼を打倒しない予定の能力者は貴方だけなの」

「！」

息を飲む。

薄々気付いていた物の、どうやらリバースの私に対する役割は『敵を油断させる為の道化になる事』だったらしい。私が一人吸血鬼との決戦と粹がっている間に彼らは密かに水面下で着々と準備を進めていた訳だ。

「リバースも大概酷い人ね」

「リバースに可愛がって貰いたかったなら彼の女になる事ね。もっとも彼の嗜好に合わなければ見向きもして貰えないけど」

「・・・」

ま。それは追々考えさせて貰おう。

「それより、そのリバースは？」

「目下、別行動中。多分そろそろ戦闘に入る頃ね」

「助けに行かないの？」

「必要無いわ。私達のノルマは吸血鬼を2体倒す事で既に終わっているもの」

「でも貴方達ならもつと活躍出来るのではない？」

「あのね」

私との問答にまた嘆息するテンペスト。

「確かに私達は2体の吸血鬼に対して圧倒的な勝利を収めたわ。けど同じ作戦が何度も通じる相手ではないし、いくら居場所を巧妙に誤魔化す機材があっても確実ではないわ。万が一私が吸血鬼に倒される事があれば連動してセシリアにも危険が及ぶ。勝率が高いとはいえ戦闘の回数はなるべく最低限に抑えるべきなの」

「でも！」

テンペストの理屈は理解出来ても納得は出来ない。

「それに私が余計な事をすれば今回の作戦に支障をきたす可能性がある。なるべく余計な事はしない方が良いのよ」

「そんなにリバースが発案した作戦が大事なの？」

「・・・」

憤慨した私の言葉に何故か沈黙する一堂。

「リバース発案の作戦だったなら私は一も二もなく駆けつけているんだけどね」

「え？」

「今回の作戦の指揮者は確かにリバースだけど発案者は別なのよ」
そう言って更にテンペストは嘆息したのだった。

第四章

俺は今、一体の吸血鬼を目の前に対決している最中だった。

「こんばんは。良い夜だね」

相手は長い髪を後ろに束ねた優男。おまけに美形だ。問答無用で顔を削り取ってやりたくなるほどの。

「それにしても随分やぼったい格好だね。仮装パーティでもあるのかい？」

「別に」

俺は顔や身体に巻き付けていたフードを引き剥がし素顔を表に晒す。

「おや？」

その俺の顔が意外だったのだろう。優男吸血鬼は怪訝に首を傾げる。

「君はひょっとしてリバースとかいう能力者じゃなかったかな？」

「それが何か？」

「君はレグやカント辺りが相手をしている筈だと思ったのだけど、どうしてこんな処にいるのかな？」

「ふう」

俺は思わずと言った感じで溜息を洩らす。

「本当。吸血鬼って言ってもピンキリだな」

「何だって？」

「明確に敵と分かっている相手がわざわざ親切に事情を説明してくれるとでも思ったのか？」

「・・・」

俺の辛辣と言える言葉に少しだけ沈黙した吸血鬼は、少しだけ表情を引き締め――。

「もっともだね。それなら吸血貴族らしく力付くで聞き出す事にし

よう」

「ふん」

相手が戦闘態勢に入った事を確認して俺は懐からそつと『彼女』を持ち上げる。九尾の子狐——玉藻を。

「頼んだぞ」

その彼女を地面に下ろすのと同時に——。

「任せてください」

長い白髪的美女へとその身を変えた。

「白面金毛九尾か。一つ聞きたい事があるのだけど良いかな？」

「何でしょう？」

「君はどちらかと言えば我々に近い存在だ。まだ幼いとはいえ人間は勿論だが人外と呼ばれる者達の中でも相当上位に入る。その君が、どうして人間に与しているのか不思議で仕方がない」

「そんな簡単な事も分からないのですか？」

「ああ。想像もつかない」

玉藻は戦闘態勢を維持したまま深い溜息を吐きだした。

「質問に答える前に一つ訂正ですが、私は別に人間に与している訳ではありません」

「そうなのかね？」

「ええ。私が与しているのは・・・」

玉藻はそこで一旦言葉を切って——。

「私の愛する人だけです！」

指で指し示した吸血鬼に無数の狐火を解き放った！

マシンガンのような連射性で次々と撃ち込まれる狐火。セシリアが俺の血を糧に力をドンドン上げているのと同じように玉藻は俺の愛情を糧に力を上げている。その意味で彼女が俺のところに来た当初からすると比べ物にならないほど玉藻の力は上昇していた。

しかし――。

「なるほど。納得は出来ないが理解はしたよ」

吸血鬼相手にダメージを与えるほどの出力では無かった。

「やはり吸血鬼相手に狐火は効果が薄いそうですね」

「いやいや。なかなか熱かったよ。少し暑すぎるサウナと言うところだね」

「一般的に、それを効果が薄いというのです」

「なるほど。勉強になったよ」

余裕の態度を崩さない吸血鬼。当然か。普通に戦ったらまず玉藻に勝ち目などないのだから。

「少し早いですが切り札を出さざるを得ませんね」

それは玉藻も理解しているのか早々に自分の手の内の中で最強の攻撃法を出す事に決めたようだ。

玉藻は両の掌を胸の前で合わせ、それをゆっくりと開いて行く。

「ほお」

その玉藻の開かれていく掌の間に紫色の水晶のような物が出現するのを見て感嘆の声を上げる吸血鬼。

玉藻の作りだした紫色の水晶の柱は長く、余裕で2メートルは超える。そして形状は巨大な鉛筆と言えば分かりやすいかもしれない。六角柱で先端が尖っている。まさに形状は巨大な鉛筆だ。

「それが刺さったら流石に痛そうだな」

「痛いので済めば良いですね！」

吸血鬼の軽口に対して玉藻は作りだした紫水晶の杭を掌の上に浮かべ、それを吸血鬼へと高速で射出した！

人間では絶対に反応出来ない速度で吸血鬼に迫る紫水晶の杭。だが――。

「残念。吸血鬼の動体視力と反応速度を侮り過ぎだよ」

「ぐ！」

気が付けば玉藻はいつの間にか背後に回り込まれた吸血鬼に背中を蹴られ、前のめりに倒れかけて慌てて体勢を整える。

「・・・」

そんな戦闘の最中、俺は踏み出しかけた足を必死に自制して踏みどまっていた。今、俺が玉藻の戦闘に介入する訳にはいかない。

「ならば！」

余裕の態度の吸血鬼に対して玉藻は二つ目の紫水晶の杭を作り上げる。

「やれやれ。君はもう少し頭の良い戦い方をすると思っていたよ」

2本の杭を余裕の顔で対処しながら吸血鬼はゆっくりと玉藻との距離を詰めていく。

「く！」

玉藻の作りだす紫水晶の杭が3本、4本と増えて、ついには6本の杭となって吸血鬼に襲いかかるが――。

「そろそろ飽きてきたな」

「あぐ！」

結局、杭は吸血鬼にかすり傷の一つも付ける事無く再度玉藻は背後から蹴り飛ばされて数メートルを転がりまわされ、玉藻の制御下にあった紫水晶の杭はその制御を失い地面に次々と突き刺さっていく。

「終わりだ、九尾の妖弧。君とこれ以上遊んでやるつもりはない」

「う・・・く」

玉藻にとどめを刺すべく迫る吸血鬼。対して玉藻はダメージが抜けきらないのか立ち上がる事も出来ずに接近を許し――。

「む？」

吸血鬼が『その範囲』に入った時、地面に突き刺さった6本の杭が共鳴し始め、その杭と同じように六角形を描くように地面に突き刺さっていた杭に並ぶように不可視の壁が吸血鬼を取り囲む。

「結界？」

「ええ。想定通り閉じ込める事に成功したようですね」

そして平然と立ち上がる玉藻。当然、先ほどまでの演技に過ぎない。

「まさかとは思うが、この程度の結界で僕を閉じ込めたつもりかい？」

「ええ。そのつもりですが？」

「愚かな。そもそも結界に閉じ込めただけでは僕を倒した事にならないだろうに。これからどうするつもりだい？僕を攻撃するにしても結界が邪魔になると思うよ」

「こちらから攻撃などしなくても朝日が昇れば自動的に私の勝ちになります。この位置とこの角度ならば日が昇れば貴方は即昇天でしょう」

「正気かい？朝日が昇るまで何時間あると思っているんだ。この程度の結界1000回壊しても余りある」

「かもしれませんね」

実際、玉藻の張った結界程度では吸血鬼を1分閉じ込めるだけで精々だ。

「ところで、この結界の形状、少し変だと思いませんか？」

「なんだって？」

「通常、媒体を使って結界を張る場合、媒体を通して結界を張るのが普通です。ですが、この結界は媒体となる紫水晶の外側に張られている」

「つまり？」

「平たく言えば私の張った結界は紫水晶ごと結界の中に閉じ込めてある訳です。これが何を意味するかと言うと私の張った結界と紫水晶には関連性が無いという事なんです」

「それが？」

「結論を言えば私の目的は紫水晶と一緒に貴方を結界内に閉じ込める事でした」

「君の言う事は今一理解出来ないよ」

当然だろう。何故なら玉藻の目的は――。

「ちなみに、この紫水晶の正式名は『殺生石』って言うんですけど

ね」

時間稼ぎだったのだから。

「な・・・に？」

「ご存じないですか？その昔、私の前身たる先代九尾が殺害された際に無限の毒を吐きだしたと言われる石ですよ」

「お・・・まえ！」

吸血鬼は驚愕に目を見開いて慌てて結界を破ろうと走り寄ろうとするが――。

「が！」

既に結界内に充満した猛毒によって身体の内は極端に奪われ、無様に地面を這いまわる。

「もうお分かりとは思いますが、私の目的は結界内に貴方と殺生石を閉じ込める事でした。結界を張った理由は二つ。一つは結界という限定空間に毒を充満させた方が効果が高い為。もう一つは万が一にでも毒の被害が私の愛する人に及ばないよう配慮してのものでした」

「ぐぐぐ」

「まあ、貴方が余裕ぶって私の時間稼ぎにまんまと付き合ってくれたのが貴方の最大の敗因ですけどね」

「き、貴様あ！」

吸血鬼は吠える。吠えるが――もう何も出来はしない。

「流石の殺生石も夜の吸血鬼を殺し切るほどの毒性は発揮出来ないでしょうね。そういう訳で貴方は当初の予定通り・・・」

玉藻は優雅な動作で懷から懷中時計を取りだし――。

「朝日が昇るまで、ここに閉じこもって貰いましょう」

残酷とは程遠い笑顔で吸血鬼を見送った。

「見ていてくれましたか？」

吸血鬼相手に完全勝利を収め、俺の元へと歩み寄ってくる玉藻は

少しばかり自慢気で、俺はそんな玉藻を――。

「ひゃっ！」

問答無用で抱きしめた。

「あ、あのリバーズ？少し苦しいんですけど」

「煩い。少しくらい我慢しろ」

玉藻を抱きしめている腕に力が入り過ぎている自覚はあった。けれど玉藻の戦闘中に感じていた不安と玉藻が勝利出来た安堵。それを実感出来るまで俺は玉藻を開放などしてやるつもりはなかった。

「・・・」

玉藻はしばらくジタバタしていたが、やがて俺が離す気が無いと悟ったのが大人しく俺の腕の中で身体から力を抜いた。

結果としてみれば楽勝と言えるほどの戦火をあげた玉藻を俺がこれほどまで過剰に心配した理由は、この島に上陸した全グループの内俺と玉藻のペアが最も勝率が低いグループだったからだ。

セシリアやゴールド達のグループの勝率が99%オーバーだったのに対して玉藻だけはどんなに上手く策を練ろうとも87%を超える勝率は弾きだせなかった。

通常で言えば87%の勝率は十分と考えられるかもしれない。しかし俺からしてみれば勝率なんて99%でもまだ低い。正直な話をすれば100%の勝率を確信出来ない戦場に自分の女を連れてくるなんて拒否したくて仕方がなかった。

そんな俺に勝率87%しか保証出来ない玉藻を心配するなど言う方が無理がある。

だから俺は自分の不安が完全に取り除かれるまで玉藻を離してやるつもりは更々なかった。

「何をしているのよ」

例えテンペスト達が俺達の元へ駆けつけてきたとしても。

「勝ったのか？」

「私達の方の勝率じゃ負ける方が難しいじゃない。そんな事よりいつまで玉藻を抱いているつもり？」

一向に玉藻を離す気配の無い俺にテンペストは目くじらを立ててくるが――。

「もうちょっと」

今回ばかりは早々離してやるつもりはなかった。

「さてと。それじゃ今回の事件の黒幕のところに行くとするか」

玉藻が生きているという実感をこれでもかというほど感じてから玉藻を解放して俺は集合した面子に確認を取る。

約1名ジト目で俺を睨んできたけど。

「黒幕？今回の吸血鬼事件の黒幕と言う意味？そんなのがまだ残っていたの？」

「この島に上陸して俺達と神剣使いの一族が倒した吸血鬼の数は17体」

「じゅ、17!？」

ロンドにはその数が予想外だったのか目を剥いて驚いている。ロンドの前情報からすれば5体前後と言う話だったし当然か。

「そして、その17体という吸血鬼を統括していた者こそが今回の俺達の本当の標的だ」

吸血鬼というのは基本的に孤高の存在の為、人間のように徒党を組むことは滅多にない。そんな彼らが集団で行動する事があるとしたら――。

「さあ。行こうか」

それは『彼女』の話通り、位の相当高い者が意思をもって統括に乗り出した場合のみだ。

その確信を持って俺は『彼女』の指し示す通り島の中心に聳え立つ城へ向けて歩き出した。

見た目は完全に城だったが城と言う割には中は思ったほどには広くなかった。

その為、俺達は思った以上に早く黒幕の待つ部屋へ辿り着く事が

出来た訳なのだが――。

「ようこそいらっしやいました」

その部屋の玉座に座り、俺達を出迎えたのは見た目で言えば年端もいかない少女だった。勿論、相手が吸血鬼である以上見た目通りの年齢ではないが。

「初めまして。私は・・・」

「イステリアⅡディールアルトレリアだな？セシリアの従姉妹の」

「あら。セシリアさんったらそんな事までお話してしまいましたの？」

そう。この少女こそがセシリアの従姉妹にして今回の黒幕。アルトレリア家は王家に次ぐ血筋の吸血鬼。生き残った吸血鬼達を統括するには十分過ぎるカリスマだ。

「セシリアさんにも困ったものね。人間に与するだけなら兎も角、私達の情報まで流してしまいうなんて感心しませんわ」

「終わりだ、イステリア。もうお前に出来る事は何もない」

この場に居合わせたのは俺、テンペスト、ゴールド、バイブル、セシリア、玉藻、ミタマ、クラウ、そしてロンドの9名と『彼女』。ゴーストを初めとした神剣使いの一族達には念の為船を護って貰っている。

例えイステリアがセシリア並の吸血鬼であったとしてもセシリアに加えてこれだけの能力者が揃えばイステリアには勝ち目などない。「そうね。セシリアさんだけなら兎も角、これだけの人数を相手にするのは流石に無理かもしれませぬね」

そしてイステリアは的確に戦力を分析出来る程度の頭脳は持っていた。

「それで。もしも私が降参すると言ったら貴方は私をどうするつもりかしら？」

「セシリアに頼んで隷属の因子を埋め込ませて野良犬相手に一生腰を振らせてやる」

「まあ。お下品」

自分の末路を語られているのにイステリアはコロコロと笑って余裕を崩さない。

「言っておくが冗談のつもりはないぞ」

「ええ。勿論わかっていますわ」

イステリアの余裕は崩れず、そして彼女は背中の方へ手を回して何かを引っ張り出してきた。

「これ。何だか分かりますか？」

それは可憐な容姿を持つ少女が持つに相応しくない無骨な機械だった。複雑な形状だが似ているものを上げるとするならば何かのスイッチ。

「地下に製造された『核』の起爆スイッチだろ？」

「な!？」

「・・・」

俺が『その事実』をあっさり言いあてるとロンドは驚愕し、流石のイステリアも少し沈黙した。

「良くお分かりになりましたね。このスイッチの事もですが私が地下に核を製造している事は極少数の者にしか知らせていなかったのですけど」

「言った筈だ。お前にはもう何も出来ない」と

「くす。それはどうでしょう？」

再度の俺の宣誓にイステリアは余裕を取り戻して起爆スイッチの安全装置をおもむろに解除した。

「じよ、冗談でしょう？それが本物だとしたら貴方も死ぬのよ？」
場の雰囲気で偽物とは思えなかったのかロンドが狼狽する。

「それが何か？」

「な、何かって」

「一つ教えておくと私はですね・・・」

「自分の命すらどうでも良いんだらう？」

「・・・」

愉快そうに語り始めたイステリアが再度俺に横から口を挟まれて

少しだけ機嫌を損ねたようだった。

「目的も無く、矜持もなく、生への執着すらない。だからお前は退屈のぎに自分の一族を全滅させる危険も顧みず吸血鬼を集結させた。お前にとっては全てがどうでも良い。だから人間如きに隷属するくらいなら敵諸共道づれにする事くらい造作もない」

「少し意外ですね。セシリアさんが私の事をそれほど深く理解していたとは思えないのですが」

「もう一度言う。無駄な事は止めておけ、イステリア。お前に出来る事など何もない」

「くす。お馬鹿さん」

俺の三度の言葉にイステリアは笑いながらスイッチを――。

「やめ・・・！」

ロンドの制止の中で迷う事無く押し込んだ。

反射的な行動なのだろう。イステリアが起爆スイッチを押しこむのを見てロンドは意味もないのに自分の頭を両腕で庇って強く目を瞑り――1秒、2秒、3秒と過ぎた。

「あら？」

ロンドが目を開いて瞬かせるのと同時にイステリアも首を傾げて起爆スイッチを更に2度3度と押し込むが――何も起こらない。

「無駄だと言ったぞ。イステリア」

「どういう意味かしら？」

「俺の組織には電子戦最強のエアーズが居る。例えどれほどの威力があろうと兵器である以上エアーズに掛ければ無効にするくらい容易い」

「ありえないわ。この島の施設は完全に外部から切り離されているのよ？外部から干渉して核の起爆を止めるなんて不可能だわ」

「だから。エアーズには島に上陸すると同時に地下の核施設へ向かって貫いた核の無効化を最優先して貫いた。無論、護衛もつけてな」
「・・・」

エアーズがこの場に居ないのはそういう理由だ。そして気に食わ

ないがアクセに彼女の護衛を任せる羽目になった。本当に気に食わないが核施設の守衛をしている吸血鬼を排除する為にはどうしてもアクセの力が必要だった。

「いくらなんでも少しおかしいわ」

「何が？」

「私の事ならセシリアさんが漏らしたと無理矢理仮定すればつじつまを合わせる事は出来る。けど貴方達が私の用意した核を食い止める為には最低限事前情報が必要な筈。それはセシリアさんでも知り得ない事。そして吸血鬼に彼女以外に裏切り者は居ない筈。どうやっても貴方達が私の行動を阻害出来た理由が説明出来ないわ」

「知っていたただけだ」

「何ですって？」

「俺達にはお前という存在の全てを知る術があった。それだけの話だ」

「意味が分からないわ」

イステリアは嘆息しながら玉座の肘掛けに手を掛け――。

「無駄よ。貴方の用意した8つの抜け道は全て事前に塞いでおいた。逃げる事は出来ないわ」

『彼女』によって完全に道を閉ざされた。

「本当にありえないわ。どうしてここまで私の行動が先読みされてしまうのかしら？　いくら噂のリバースとはいえ、ここまで私の行動を先読み出来るものなのかしら？」

「言った筈だ。先読みなどしていない。俺達はお前を『知っているんだ』」

「・・・」

イステリアは俺の言葉に数秒沈黙してから――。

「ま・・・さか」

その目を大きく見開いて『彼女』を凝視する。

「予知・・・能力者？」

「ご名答」

今回の作戦の立案者である『彼女』——フェイクが少しだけ前に出てイステリアの驚愕に対して解答する。

「あ、ありえない！まさか本物の予知能力者を引き入れていたなんて！そんな情報は聞いていないわよ！」

当然だ。

俺は今回の案件までにフェイクの力に頼った事はないし、フェイクはクラウとその組織によって徹底的に隠蔽されてきたのだから。

あの夜。俺が対吸血鬼用の作戦を頭の中で立案していた夜。フェイクは俺の前に立ち進言してきた。俺が敗北するという結果を、未来を。

俺がいくら頭を回し策を立てようと可能なのは島に現れる17体の吸血鬼を味方に損害なく退治するところまで。イステリアの自分の命すら欲しがらない性格と地下に製造された核までは俺にはどうやっても対処出来ない。

だからフェイクは迷わず進言出来た。

『私に任せてください』と。

大反対したのは勿論クラウだ。クラウはフェイクが予知を使う事に最後まで反対して——。

『私の邪魔をするな！クラウ』

フェイクを本当の意味で覚醒させた。

過去、どれだけ遡っても一分子の記憶にも無いフェイクの兄に対する壮絶ともいえる暴言。兄を兄と認識せず能力名で呼ぶ事すら初めてだっただろう。

『これは私が私の意思で私の望む事の為の行動よ。だから・・・邪魔をしないで』

『・・・』

その辛辣とも言える言葉を受けたクラウは——その場で膝を折っ

てワッ！と泣きだしてしまった。

『・・・』

流石の俺もその対処には途方に暮れた。

ちなみにクラウの名誉の為に捕捉しておくが別に奴は妹に冷たく接されたから泣き出した訳ではなく、妹の成長がこれ以上なく嬉しかったらしい。少なくとも恥も外聞も捨てて涙泣きしてしまうくらいには。

そしてフェイクの意思の元、今回の上陸作戦に参加する全ての面子に対してフェイクは完璧な作戦を授けた。完璧な未来を。

だからイステリアは終わりなのだ。

フェイクの予知によって俺達は既にイステリアの全てを『知っている』。だからこれからイステリアが何を考えて何をしようとしているのか手に取るように分かった。

「く。ぐぐぐ・・・おのれ」

完全に身動きの取れなくなったイステリアに既に余裕の表情は無い。

「さっさとしろよ」

「なん・・・ですって？」

「もうお前に出来る事なんて一つしか残ってないだろう？早くやれよ」

「・・・」

イステリアに出来る最後の選択肢——否、選択肢なんて良い物ではない。イステリアに出来る最後の行動だ。

それは自分で自分の命を終わらせる事。

「舐めるな！人間風情が！」

しかし往生際が悪くイステリアは隠し持っていたナイフをフェイクに向かって投げ付ける——が。

「く」

俺——そして当然クラウが完璧にフェイクの防御に回る。

「は、反則よ。こんなの！」

イステリアの言葉は真実だった。何故なら作戦を立案する者が本物の予知能力者であった場合、その相手にとって敗北は100%決まった事になってしまうからだ。作戦立案者が予知能力者である時点で既に反則以外の何物でもない。

「だから？」

「く！」

無論、反則だからと言ってイステリアに他の道が出来たりはしない。

「自分の命すらどうでも良いんだろう？ だったらさっさと終わらせろよ」

「！」

俺の言葉にイステリアは歯が砕けるのではないかと言うほど強く歯を噛みしめる。

それも当然だ。イステリアに取って今自分一人が死ぬと言う事は途轍もない屈辱なのだ。予知能力者とはいえ年端も行かない、しかも見下してきた人間に完璧に敗北して自分の人生に幕を閉じなくてはいけない。それは目的も矜持もないイステリアにとってすら途轍もない屈辱だった。

しかもイステリアにはその屈辱をはねのける力も策もない。

最大級の屈辱の中、しかも自分を屈辱に叩き落とした人間達に何のダメージも与える事が出来ないまま自分だけが無意味に命を終わらせる。

納得など出来るものか。

イステリアに取って今の状況は最低最悪だった。

勿論、フェイクにそうなるよう誘導させたのは俺だが。

更に俺は最初にイステリアが降伏した場合どうなるのか教えてやった為に彼女には降伏の道すらも断たれている。

「覚えていろ。予知能力者」

だからイステリアに出来るとしたらフェイクに対して呪いをかけ

る事だけ。

「例えば私は死んでもお前だけは絶対に許さない。永遠にお前を恨み続けてやる！」

呪いとは言葉だ。イステリアの怨嗟の声は例え本当に効果が無くともフェイクの脳裏に残り残りの人生を苦しめる。

「なら・・・」

だが――。

「お前が一生フェイクを恨み続けると言うなら俺が一生フェイクを護り続けてやる」

「あ」

今回ばかりは相手が悪い。

呪いは呪いによって破られる。イステリアの言葉に震え始めたフェイクを俺が後ろから抱き締め、イステリアの呪いを言葉を持って解呪する。フェイクの身体の震えはたちまち収まっていった。

「ちくしょう」

だからイステリアに出来る事は――。

「ちくしょう――！！！！」

無様に叫びをあげて自分の命を終わらせる事だけだった。

第五章

「骨折り損のくたびれ儲け、か」

「それは私に對する嫌味かしら？」

喫茶店で呟いた俺の言葉に Rond がジト目で俺に抗議してくる。

しかし實際の話、吸血鬼退治で俺が得た物と言えば目の前にいる女——Rond のみだ。デイドの方はイステリアの死後回収に向かった時には既に姿が無かった。貴族の支配が抜けて逃げ出したか、それとも別の誰かに支配されたか。

どちらにしろデイドは行方知れずだ。別に欲しくもなかったから良いけど。

「島じゃ最初から最後まで驚き役だったくせに」

「それは貴方が私だけ除け者にして何も教えてくれなかったからでしょう」

「最低限、誰か一人は事情を伏せて行動させて相手の作戦に素直にリアクションして貰う必要があったからな。少なくともフェイクの作戦上、お前さんは結構重要な役割を担っていたよ」

「理解は出来ても納得は出来ないのよ」

島での Rond の役割は敵の行動に驚いて敵に素直に行動して貰う事だ。秘密の作戦を暴露して誰も驚かなかったら流石に怪しまれる。その意味で Rond の役割は重要だった。

「それで一応確認しておきますけど」

「ん？」

「私はアポカリプスの構成員として貴方達と行動を共にする。それで良いのかしら？」

「アポカリプスってのは他の組織が勝手に付けた他称だ。俺達には特に決まった名称は無い」

「質問の答えになっていないわ」

やれやれ。相変わらず変なところで優秀なこと。

「少なくとも暫くは俺達と行動を共にしてもらう。その後の事はお前さん次第だ」

「なるほど」

本当に俺の言っている意味を理解しているのか怪しいが本人が納得しているなら構わないだろう。

ロンドは優秀だった。

少なくとも俺の予想を二回りくらいは上回るくらいには。

「それは貴方がずぼらなだけでしょう？私は私の出来る事をやっているだけよ」

「へいへい」

少々口煩いところはあるが仕事は丁寧だし機転も効くし、なにより現場仕事も事務仕事も両方こなせる貴重な人材だ。俺は勿論ゴールドの評価も高い。

「・・・」

ちなみにロンドは絶対に認めたりしないだろうが彼女は徐々に俺に惹かれ始めているようだった。

なんらかのきっかけ。俺が少し口説くだけで恐らくロンドはその感情を自覚し短期間、俺に対する態度が余所余所しくなるだろう。それから更に期間が過ぎれば自分から俺にアタックしてくる。

少なくとも俺にはロンドの行動が読み取れた。フェイク程ではないが。

ロンドをどうするか？

その事に対しては俺は既に態度を決めゴールドを初め本人以外の全ての組織の人間には伝えてある。

「それで何の用かしら？」

その決定を実行する為、俺は今日ロンドを例の喫茶店へと呼び出していた。

「お前さんが予想よりずっと優秀だから褒めてやろうと思ってね」
「その上から発言さえなければ素直に喜べるのだけどね」
そう憎まれ口を叩くが本心では嬉しそうだった。

「あとはこの腕輪さえ何とかしてくれれば言う事はないのだけど」
「何か支障あったか？」

「大分能力を使うコツが掴めてきたの。多分、もう腕輪無しでも今と同レベルの制御が出来ると思うわ。それを試す意味でも腕輪は無い方が良かったかもね」

「ふーん」

言葉の中には腕輪を外して完全に束縛から解放された状態で俺と向き合いたいというニュアンスが含まれていた。

「外しておくか？」

「え？」

「腕輪。外して欲しいか？」

「出来るの？」

恐らくロンドの知識の中には腕輪は一度付けると取り外し出来ないといんぷットされているのだろう。

「元々腕輪は神剣を模して造られた量産品だからな。オリジナルの神剣を持つ俺なら多少は融通が効くんだ」

「そう、なんだ」

ロンドは一瞬、躊躇はしたもののそつと腕輪の付いた右腕を俺に差し出してくる。

「それじゃお願い」

「ああ」

俺はロンドの右腕を取って。

「ごめんな」

「え？」

そつと腕輪を抜き取った。

★ 舞踊発電？

「あれ？」

気がつくとは私は自室の机の前に座り込んでボンヤリと授業で使ったノートを眺めていた。

「私、何・・・してたんだっけ？」

私の名前は館社鏡美。そして――そして――何だっけ？他にも何かあったような気がするけど何も思い浮かばなかった。

「うーん」

私は頭を悩ませながら机の引き出しに手を掛けて――。

「きゃっ！」

唐突に指に走る痛みに慌てて手を引っこめる。

「何？今の。静電気？」

こんな時期に？季節外れにも程がある。

私は恐る恐るもう一度引き出しに手を掛けてみるが今度は大丈夫だった。ほっとして引き出しを開けてみるが特にめばしい物は入っていない。

あれ？ここに日記帳を入れていたと思ったのに勘違いだったかな？

「ま。いつか」

私は特に気にする事もなく明日の予習を始める事にした。

自分が何か大事な事を忘れている事には気付いていたが、何故かそれを思い出しはいけないような気がした。

だって、もしそれを思い出してしまったら――泣いてしまいそうだから。



「良かったの？」

「何が？」

「ロンドに決まっているでしょう」

俺が他の女とイチャイチャしていると怒る癖に、他の女を突き離

しても文句は言ってくるんだな。

「あの子、本当に優秀だったのに。手放しちゃって良かったの？」

「惜しいとは思ってるよ」

実際、俺の独断でロンドの能力者とその近辺の記憶を念入りに封印して日常に帰した事にゴールドは不満を露わにした。

「じゃあ何で？」

「後一人」

「？」

「俺の甲斐性的に言って全ての女をきちんと目の届く範囲で見られるのには後一人が限界だ。その最後の一人にロンドは相応しくなかった」

「えっと。別の意味で呆れたんですけど」

順番に言えばテンペスト、ミタマ、玉藻、セシリア、エアーズ、フェイクの6人が俺の女な訳だから俺の限界人数は7人と言う事になる。

「ロンドも悪くない女だったが俺の嗜好にヒットする要素が無かった。出来れば最後の女は可能な限り手に入れにくい女が良いな」

「それってひょっとして・・・」

「候補ではあるな」

「本気？」

テンペストの言葉は『彼女』の性格面ともう一つ――彼女を手に入れる為の階段の高さを懸念しての物だ。

『言っておきますけどね』

無論、俺達の会話など『彼女』――ゴールドには筒抜けなので何か言ってくる事は分かりきっていた。

『私には既に婚約者が居ますからね』

「それは良いな」

『・・・余計な事を言ってしまったわ』

自分の言葉が俺にとって逆効果だと思い出したのか嘆息するゴールド。

『まあ、それ以前の話、今の私には恋愛に現を抜かすような暇も余裕ありません。そもそも貴方は私のタイプでもないし』

「へえ」

『・・・』

俺の余裕の態度にゴールドは少しばかり沈黙してなにやら考え込んでいる。

『一つ聞きたいのだけど貴方って私の事が好きだったの？』

「そんな事はお前を手に入れた後にでも考えるさ」

『・・・私は候補の一人というだけではなかったのですか？』

「たった今、最後の一人はお前に決めた。婚約者が居ると言うのが良い」

『・・・本当に失言だったみたいですな』

ピアスの向こう側で深く嘆息するゴールド。しかし態度は兎も角、相性的に言って俺と彼女はそれほど悪くはないはずだ。

それにゴールドは自分で思っているよりもロジカルに物事を考えられる女じゃない。時には感情で動き、間違えていると分かっているでも突き進む。ゴールドというのはそんな情熱的な女だ。

「なんだ。考えてみればお前って凄く良い女なんだな」

『何ですか。いきなり』

「いや。今まで第一印象の金髪ってしか認識してなかったけど、よく思い返してみるとお前って相当レベル高いよな」

『まあ、財産面で言えば世界でも5本の指に入る家柄だとは思いますが』

「俺がそんなものを評価して『良い女』だなんていうと思っているか？」

『貴方なら、それも込みでの意見だと思いましたが？』

『・・・』

流石に指導者を張るだけあって俺の事をよく分かっている。勿論、その程度の切り返して諦める奴だとも思われていないだろうが。

「なんだか久しぶりに楽しくなってきたな」

『貴方の趣味を今更咎めるつもりはありませんが、趣味に走りすぎて本業を忘れないでくださいね』

「大丈夫。大丈夫。狙った女の不評を買うような事を俺がする訳ないじゃん」

『・・・はあ』

ゴールドは最後に大きく嘆息するとピアスの通信を切った。

「本気でゴールドを狙うつもりなの？」

「ま。他にめぼしい候補が出てこなければの話だが」

ゴールドとの会話中に口を挟まなかったテンペストがオズオズと聞いてきたことに俺は気楽に答える。

「ゴールドにはああ言ったがまだ本決定にする気はない。それに・・・」

俺はニヤリと笑って胸を張って答えてやる。

「本気で後一人だなんて信じてるわけじゃないんだろう？」

「あゝ。やっぱり？」

テンペストが俺とゴールドの会話に口を挟まなかった最大の理由が多分これ。彼女は最初から『後一人』なんていう俺らしくない発言を疑っていたのだ。

「ゴールドの手前ああ言っておいたがロンドを切った本当の理由は純粹に俺があの子を欲しいと思わなかったから。そんな女にいつまでも俺の秘密を知られたままの状態にしておくのが面白くなかったから」

「あの子、本当に優秀だったのにねえ」

「それは認めるが俺とは相性が悪かった。それにあいつは日常と非日常を天秤に掛けて整合を付けて釣り合わせていたみたいだしな」

俺がロンドを日常に返しても問題ないくらいにはあの子は中間で折り合いを付けていた。

「私も別に日常を捨てた訳じゃないんだけど」

「俺が捨てると言ってもか？」

「・・・」

テンペストも一応は日常を確保はしている。しかし、それは本当に『一応』というレベルだ。俺が本気で捨てる事を彼女に望めば恐らく二つ返事で捨ててくれる。

その程度の覚悟を俺の相棒は持っていた。

「ひょっとしてさ」

「ん？」

「ロンドの事、羨ましいとも思っていたの？ 日常に帰れる道を残している彼女が」

「・・・さあな」

俺はその事については考えないようにしている。日常に未練があるとは言わないが完全に捨て去る前に何か道はあったのでは？ と思わないでもないからだ。

「それに俺の相棒は一人で十分だ」

「そんな事言って、他の子に聞かれたらどうするつもり？」

照れながらも言い返してくるテンペスト。流石一番付き合いが長いだけあって俺の口説きへの切り返しも出来るようになってきたらしい。

「大丈夫、大丈夫。他の子と一緒に居るときも同じ事言うから」

「・・・正直過ぎない？」

「黙ってたらお前余計に怒るじゃん」

「う」

図星なのか唸るテンペスト。いつまで経っても嫉妬すると分かっているのに覗き見をやめられない女というのも問題だ。

エピソード

★ 黄金聴域

「まったく。私がピアスの通信を切ったくらいで聞き耳を立てるのを本気で止めたとも思っているのかしら」

私の可聴域はリバースの装備するピアスからはテンペストと同じく300メートルほどだが私自身からの飛距離は数キロ先の物音まで聞き分ける。

その意味で私はピアスの通信をきった後もリバース達の会話を聞いていた訳だが――。

「リバースがそんなに迂闊な訳がないわ。恐らく私に聞かれてもいい程度の内容をテンペストの為に話しているのね」

あの男はなんだか言って目の前のいる女を最優先する節があるし。

「お嬢様」

嘆息する私の隣に待機していたバイブルが静かに進言してくる。

「お望みとあれば私がリバースを始末してまいりますか？」

「・・・」

絶望的なまでに見当はずれな進言を。

「貴方は良いわね」

「？」

もっとも、この愚直なまでの忠誠心と見た目とは裏腹に常識的な倫理観がバイブルの強みといえば強みなのだけど。

「例えばの話だけど、私が貴方にリバースの抹殺を望んだとして」

「はい」

「貴方にリバースが殺せる？」

「リバース程度の能力でしたら問題なく殺せます」

「あのテンペストの目を掻い潜って？」

「・・・」

「電子戦最強のエアーズをやりすごして？吸血鬼すら手玉に取ったフェイクの予知の未来を越えて？玉藻とセシリアの人間離れた戦闘力を圧倒して？ミタマに能力強化されたリバースを3回殺せる？」

「そ、それは・・・」

「そして最大の問題として貴方自身がリバースの前に立った時、彼の言葉を聞いて彼に殺意を継続し続けられる？」

「・・・」

無理に決まっている。リバース単体のみの戦力を考えればバイブルに勝機はあるが、そんな事はリバースに限って絶対にならない。彼は一人で戦う事を矜持としていないのだから。

それにバイブルの常識的な論理間ではアッサリリバースに言い切るめられるだけだ。

「それでも万が一貴方にリバースを殺せてしまうと、それはそれで困ってしまうのよね」

「？」

相変わらずバイブルは自分で考える事を放棄しているようだった。「まず私の意志で貴方がリバースを殺した場合、当然彼の相棒であるテンペストは私の組織を抜けてしまうわね」

「あ」

「そしてエアーズ、玉藻、セシリア、フェイクと抜けた上、エアーズが抜ける事で神剣一族との繋がりも切れる。フェイクも抜ける訳だからクラウドと彼の集めた組織も抜けるわね。それに玉藻が抜けるという事はアクセも居なくなるわ」

「・・・」

「残るのは私と貴方。そして私が集めた非戦闘員達くらいね。組織を運営するにしても継続する意味のある人員ではないわ」

「ま、まさか・・・」

「そう。勿論、最初からそのつもりだったわけではないでしょうが

途中からは確実に意図的にそうなるように仕組んだ筈よ。私が彼を故意的に排除した場合、私の組織が崩壊するようにね」

「あの男！」

激昂して歯を食いしばるバイブルだが今更何をしたところで現状は変わらない。リバース抜きでは私の組織は成立しないように構成されてしまっているのだから。

もっとも、そのお陰で私は組織の指導者の多忙さからは解放されて居る訳だから文句をいう筋合いでもない。組織の指導者は確かに私だが組織の軸となる存在は間違いないくリバースだ。

「だからこそ良い機会なのだけどね」

「え？」

「私がリバースの女になれば当然リバースの立ち位置も変わるわ。私が上手く立ち回りさえすればリバースの独占状態を解除出来るかもしれない」

「しかし、その為にお嬢様が犠牲になるなんて」

「犠牲？」

バイブルの言葉に私は咄嗟には意味を理解出来なかった。

「ああ。貴方、私がリバースの慰み者にされると思っているのね」
「・・・」

気まずそうに視線を逸らすバイブルには悪いが私個人の意見としては犠牲にも慰み者になるイメージも持たなかった。

バイブルとは違って私にはリバースに対する嫌悪感は全く無かったからかもしれない。

「・・・拙いわね」

「どうしました？」

「いえ。ちよつとね」

今気付いたが私はリバースに対して嫌悪感どころか好意すら抱いている。同士として私に同調してくれる彼、私の意見を聞かずとも飲んでくれる要領の良さ。嫌う要素が一つとしてないのが問題だ。

「最初から想定して動いていたなら逃げられないかも」

「？」

「リバースが今になって私に狙いを定めたということは私に対する前準備が終わったと言う事。全てがリバースの計画通りだったなら、もう彼の筋書きを変更するのは私には無理かもしれないわ」

「そんな！」

「？」

私の諦観とは違う言葉にバイブルは意外にも声を荒げていた。さつきから思っていたが何で彼女はここまで強行にリバースを拒絶しようとするのか。

その意味を少しでも考えて――。

「ああ。そういう事」

「お嬢様？ どうし・・・」

「貴方もリバースに惹かれていたのね」

「！」

その結論を出した私にバイブルは目を丸くして驚く。

「考えてみれば貴方はリバースを殺すと明言した訳ではなかったわね。彼を殺せると本気で思っていたわけではないのね」

「・・・」

「それに貴方が反対したのは『私が』リバースの女になる事でリバース本人を非難していた訳じゃない」

「ち、違います。私はそんな・・・」

「6人も女を侍らせているリバースに対して今更私に嫉妬してもね」
「・・・」

正確に言うと私だけがリバースの女になる事が不満なのだろう。私がリバースの女になるなら自分もリバースの女になれるのは不公平ではないかと。恐らくは無意識にそう思っていたのだろう。

「ああ」

そこでリバースの話の続きに繋がるわけか。ピアスの通信を切ったのを確認して話したのは目の前のテンペストだけに対してではなくバイブルが抱いている感情を私に悟らせるためだったわけか。

リバースが『後一人』と明言した事はピアスを通じてバイブルにも伝わっているが、その後の会話はバイブルには聞かせていない。「本当。どこまでも計算高い男ね」

バイブルに自分の感情を自覚させる為に私との通信を利用していたのだろう。

「バイブル。一つ良い事を教えてあげるわ」

「な、何でしょう？」

無意識に自分で感じていた感情を見抜かれたバイブルはかなり動揺しているようだった。

「・・・」

ま。もっと動揺させるんだけどね。

「リバースが後一人といっていたのは嘘だったみたいよ」
「！」

予想通り激しく動揺するバイブル。そして同時に相当安堵していることも分かる。

「だから私がリバースの女になってもリバースの限界人数を超えたりしないわ。貴方の枠もちゃんとリバースは残してある」

「お、お嬢様？」

「だから私と貴方がリバースを取り合っていがみ合う必要はないのよ」

「・・・」

バイブルは表面上は否定するだろう。しかし、ここまで明確な状況証拠が出てしまっただけは疑うなというほうが無理だ。

「もし、ここまで計算づくというなら完敗ね」

「は？」

「もしリバースが私と貴方でリバースを取り合うようになることまで計算づくでしかけてきているなら私達にはもうどうしようもないわ。だってどこまでも疑えるんだもの」

「・・・」

「例え偶然だろうと計算だろうとリバースの仕業にしか思えなくな

る。それはつまり私達は完全にリバースの手の上で踊らされているということなのよ。敵わないわ」

この先、リバースに取って都合の良いと思われる展開は全て彼の計算なのか、それとも唯の偶然なのかを私達に判断する事は出来ない。だから私達は思ってしまう。これも彼の計算の内なのか、と。その思いが頭の何処かにある限り私はリバースを自分より上の存在として見てしまう。

勝手に私がそう思い込んでしまう訳だ。

私がリバースに対して『物凄く計算高い人』という印象を払拭出来ない限り、それは何処までも付いて回る。

「困ったわねえ」

しかし、それでも危機感を抱けないのはきっと彼に籠絡させられた女達が様に幸せそうな事実を知っているからかもしれない。



「それで実際何処までが計算通りなの？」

ゴールド達の会話を当然のように覗き見していたテンペストからの質問。

「それを明言しない事が相手よりも優位に立つ為のコツなのさ」

「私にも教えてくれないの？」

「いや。実際の話、俺にも何処から何処までが計算なのか良く分からないんだよね。気が付いたらそういう展開になってるんだよ。経験上の誘導とかも勿論あるんだけど、俺が毎回意識して誘導している訳じゃないしな」

「それって無自覚に相手を誘導して自分を優位に立たせているって事じゃないの？全部が計算って言われるより性質が悪いと思うわ」

「かもね」

俺は笑いながら否定も肯定もしなかった。

ま。そんな事より――。

「やっと面白くなってきたな。次の展開が楽しみだ」

エピローグ（後書き）

物語の中にくような内容がありますが続きを出すかはまだ未定の段階です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2449p/>

反転・遊戯　ーリバース・ゲームー6（仮）下

2010年12月27日00時55分発行